

家族的類似性についての予備的考察

関 口 浩 喜*

はじめに

家族的類似性 (Familienähnlichkeit) という概念は、ウィトゲンシュタインの後期の代表作『哲学探究』 (*Philosophische Untersuchungen*) において本格的に導入されたものである。この家族的類似性という概念は、後期ウィトゲンシュタインの観点を決定的なかたちで形成したという点においても、そしてこの概念からいくつかの重要な帰結が生じるという点においても、重大な意義をもっていると私は考えている。

もちろん、多くのウィトゲンシュタイン研究者たちもまた、家族的類似性が重要な概念であることは認めるであろう。にもかかわらず、私にとってはいささか奇異に思われることであるが、この概念を主題的にとり扱った研究論文の数は、少なくともわが国においては極端に少ない。その理由を私なりに推測すれば (と言ってもこれは憶測の類であるが)、まず、ウィトゲンシュタイン自身がこの概念について (彼にしてはめずらしく) ていねいで具体的な説明を施しているということが挙げられる。そこにあえて別の説明をつけ加える必要はない、と研究者たちは感じているのかもしれない。もう一つ、より重要な理由として、「家族的類似性」 (もしくは「類似性」) という言葉は、『哲学探究』第六十七節の前後数節に集中的に登場したあとでは、二三の箇所を別とすれば、

* 福岡大学人文学部教授

『哲学探究』のなかには登場しないということが挙げられる。たしかに家族的類似性という概念は、ウィトゲンシュタインによって華々しく導入された概念なのであるが、はたしてそれが『哲学探究』全体のなかでどのような位置を占めいかなる役割を果たしているのか、それを探るための明示的な手がかりがきわめて乏しいのである。したがって、ウィトゲンシュタイン自身によるこの概念の説明を引用し多少のパラフレーズをそこに施す以上のかたちでこの概念を解明するためには、『哲学探究』全体（場合によっては中期や前期にまで遡るウィトゲンシュタインの哲学的な営みの全体）に及ぶ広範囲な精査と検討とに立ち入らざるをえない。これは、こう書いただけでも気の遠くなる作業である。

本稿¹では、そのような本格的な考察には立ち入ることはできない。本稿が目指すのは、このような（わが国の）ウィトゲンシュタイン研究の状況に鑑みて、まずはこの概念を考察するための基礎的なデータのいくつかを整理し、あわせて基本的な問題点の若干を指摘することである。その意味で本稿はまったくの予備的考察に過ぎないが、この概念の輪郭と広がりとをある程度示し、それを通じてこの概念の重要性の一端なりともを示唆することができれば、と考えている²。なお、本稿はウィトゲンシュタインの家族的類似性という概念（及び、他の関連する諸概念）とテキストとについてある程度の知識を読者がすでにもっていることを前提にして書かれている。それゆえたとえば、この概念を紹介するためにならずと言ってよいほど引用される『哲学探究』の第六十五節から第六十八節付近にかけてのウィトゲンシュタインの文章はこれを周知のものと見なし、そこからの引用は必要最低限に抑えている。限られたスペースを節約するための措置でもあるが、この点、あらかじめ一言お断りしておく。

I 「家族的類似性」という言葉をめぐっての予備的考察

1. 出典

『哲学探究』において、「家族的類似性」という用語が初めて登場するのは

第六十七節においてである。そこにおいて彼は「これらの類似性を特徴づけるのに、「家族的類似性」という表現以上に適切な表現は思いあたらない」と述べてこの用語を導入している。このウィトゲンシュタインの言い方にも示唆されているように、「家族的類似性」という用語は、ウィトゲンシュタイン自身の造語ではない。ウィトゲンシュタインがこの言葉をどこから借用したのか、その出典 (source) に関しては諸説ある。

たとえば Glock [1996: 120] は、ありうる出典としてニーチェの『善悪の彼岸』(*Jenseits von Gut und Böse*) とニコ (Jean Nicod, 1893-1924) の『感覚的世界における幾何学』(*La géométrie dans le monde sensible*, 1924) とを挙げている。Sluga [2006: 10] は、Glock のその指摘に言及しながら、この言葉がニーチェの発案によるものではなく、すでに十九世紀初期に用いられている言葉であること、及び、この言葉がラテン語の 'gentilis similitude' から派生したものであることに、Grimm の *Wörterbuch* にもとづいて注意を促している。

しかし、もちろん、ここでの問題は「家族的類似性」という言葉そのものの出典ないし起源ではなく、ウィトゲンシュタインがこの言葉を誰のどの著作から得たのかという、その意味での出典であり起源である。そしてこの点に関しては、ウィトゲンシュタイン自身がそのソースを明かしていないために、すべては推測の域を出ない。また、あらゆる起源についての考察の場合と同様、単一の起源があると独断的に想定することも危険である。したがって、ここでは、ありうる出典のいくつかを挙げ、それらに関して若干のコメントを付すに留めざるをえない。

(I) Sluga [2006: 10] は「ウィトゲンシュタインが「家族的類似性」という用語をニーチェの『善悪の彼岸』から受けとった可能性 (likelihood)」という表現を用いてニーチェ起源説を強く示唆している。たしかに、ウィトゲンシュタインがニーチェに関心をもち、その著作を読んでいたことは事実である。

たとえば、ウィトゲンシュタインは第一次大戦中、「アンチ・クリスト」「ワーグナーの場合」「偶像の黄昏」「ニーチェ対ワーグナー」などが収録されていたニーチェの著作集の第八巻（グロースオクターフ版）を購入し、「アンチ・クリスト」を念頭に置いて書かれたと推測される覚書を残している（Sluga [2006: 10]、マクギネス [1994: 382]）。また自身の著作においてしばしばニーチェに言及している。だが、ウィトゲンシュタインが、「家族的類似性」という言葉が登場するニーチェの『善悪の彼岸』を読んでおり（それはありそうなことだが）、かつそこからこの言葉を借用したということの直接的な証拠はない。

Glock [1996: 120] と Sluga [2006: 10] とがともにウィトゲンシュタインの（ありうる）出典箇所として言及している『善悪の彼岸』第二十節において、ニーチェは次のように述べている。「インド・ギリシア・ドイツのすべての哲学的思考に通ずる驚くべき家族的類似性は、簡単に説明される。ここには言葉の血縁関係（Sprach-Verwandschaft）がある」（Nietzsche [1984: 30]、ニーチェ [1954: 37]）。ただし後者では「家族的類似性」の部分は「血縁の類似」と訳されている。また、「血縁関係」の部分は「類縁」と訳されている）。ニーチェはここで、言語の血縁関係に基礎をおく哲学的思考の家族的類似性に言及している。すなわち、ある語族間における血縁関係が、その語族に属する哲学者たち思考のパターンを互いに家族的に類似したものとしている、というわけである。ニーチェ起源説を採る場合には、ウィトゲンシュタインの「家族的類似性」という言葉もしくは観点の背後に、思考の家族的類似性というモデルがあったということになる³。

（Ⅱ）Glock [1996: 120] がもう一つの（ありうる）起源として名前を挙げているニコに関しては、今回その著作 *La géométrie dans le monde sensible* に直接当たって確かめることができなかつたので、以下は Baker & Hacker [2005] における記述に全面的に依拠するかたちで述べることになる。

Baker & Hacker [2005: 155] は、ウィトゲンシュタインがその著作のいくつかにおいてニコの名前に言及している事実を指摘したうえで、ウィトゲンシュタインの考え方との間に見られる注目すべき三つの類似点を挙げている。それぞれを要約すれば、1) ニコが「全体的類似性」と「局所もしくは部分的類似性」とを区別していること（並びに、その区分がトポロジーにおける議論のなかで登場するものがあること）。2) 「類似性 (similarities) をもつ、重なり合う二つの構造ないしネットワークが、たがいに交叉し、その結果として同一のデータが異なった二つの仕方配列される」という事態が生じる、とニコが述べていること。3) 部分的類似性という関係によって核が形成され、その核の周囲に家族が形成されることがある、とニコが述べていること。

さらに Baker & Hacker は、ウィトゲンシュタインが『哲学探究』第六十六節で用いた 'Ähnlichkeiten im Großen und Kleinen' という表現に Anscombe が与えた英訳 'over - all similarities' 及び 'similarities of detail' に対して異を唱えている。Baker & Hacker はこの 'im Großen' と 'im Kleinen' とが数学用語（この場合はそれぞれ「大域的」、「局所的」という和訳が相当しよう）であり、ウィトゲンシュタイン自身がこの表現をテクニカルな意味で用いていると指摘している (Baker & Hacker [2005 153f.])。

もし仮に、ウィトゲンシュタインが「家族的類似性」という言葉もしくはアイデアをニコに負っているとすれば、この考え方の背景には、幾何学あるいはトポロジーの観点が含まれていることになる。ただし、ニコ自身は「家族的類似性」という用語それ自体は用いていないようであることは付け加えておきたい。

(Ⅲ) Glock [1996: 120] は言及していないが、ウィトゲンシュタインの「家族的類似性」という言葉の出典をショーペンハウアーに求められる可能性もある。ショーペンハウアーは『意志と表象としての世界』(*Die Welt als Wille und Vorstellung*, 1819) において、形態学 (Morphologie) と原因論

(Aitiologie) とを対比したうえで、形態学が植物のもつ「数え切れない、無限に多様な、しかしまぎれもなく家族的類似性によって似かよった諸形態をわれわれに示してくれる」と述べている (Schopenhauer [1995: 153]、ショーペンハウアー [1980: 243]。ただし、後者では「家族的類似性」とではなく、「種族的類似性」と訳されている)。

『意志と表象としての世界』がウィトゲンシュタインの愛読書の一つであり、そしてこの本が前期の『論理哲学論考』(*Tractatus Logico-Philosophicus*) の独我論的世界観に大きな影響を与えていることはよく知られている。そのことを考え合わせると、この一節を念頭においてウィトゲンシュタインが「家族的類似性」という言葉を『哲学探究』に書きつけた可能性はある。もしウィトゲンシュタインが「家族的類似性」という用語とアイデアとをショーペンハウアーから受けとっていたとすれば、ショーペンハウアーのこの本は、前期のみならず、後期のウィトゲンシュタインにも決定的な洞察と影響とを与えたことになる。ちなみに「形態学」という言葉は、改めて言うまでもなくゲーテに由来する言葉である。ゲーテに関しては後で触れるが、もしウィトゲンシュタインがショーペンハウアーからこの言葉とアイデアとを借用しているとすれば、その場合、ウィトゲンシュタインの「家族的類似性」は形態学(とりわけ、植物をモデルとする形態学)に由来する観点であることになる⁴。

さて、以上、ウィトゲンシュタインが用いた「家族的類似性」という言葉の出典ないしは起源について三つの可能性を見てみた。最初に断ったように、これら三つの出典はどれもたんなる可能性と推測との域を出ない。これら三つの出典となった著作のすべてがウィトゲンシュタインに影響を与えたのかもしれないし、あるいはまたこれらとは別にこの言葉の出典があるのかもしれない。

しかしながら、この出典の問題を考えるに当たっては、ウィトゲンシュタインが「家族的類似性」という言葉をどこから借用したのかという問題と、家族的類似性という観点をどこから借用したのかという問題とを一応は区別する

ことが必要であると思われる。この二つの問題を区別しておかないと、ウィトゲンシュタインがこの言葉を誰かの著作から借用したという事実が、ただちにこの観点をもそこから得たという事実に変わりかねない。もちろん、ある言葉が、その登場する文脈や著者がそこに込めた意味あいからまったく独立に存在しているということとはありえない以上、たんに言葉だけを借りるという事態はありそうもないことではあるが、上に瞥見した三つの可能性が示唆しているのは、むしろウィトゲンシュタイン自身の家族的類似性という観点をもつ独自性である。

冒頭に述べたようにウィトゲンシュタインが「家族的類似性」という言葉を『哲学探究』において導入したのは第六十七節においてであった。そこにおいて彼は、「家族的類似性」という表現が諸ゲームの間に成立している類似性を特徴づけるのに最も適切な表現であることの理由を次のように説明している。「というのも、ある家族のメンバーの間に成り立っている多様な類似性、たとえば体つき、顔立ち、目の色、歩き方、気性、等々も〔ゲームの場合と〕同じように重なりあい、交叉しあっているからである」〔 〕内は関口による補足。以下同様）。彼は、家族の構成員の間に成り立っている類似性が、諸々の「ゲーム」と呼ばれる営みの間にも見てとれると考え、諸ゲーム間に成立しているその類似性を特に「家族的」類似性と呼んだというわけである。

このウィトゲンシュタインの説明をそのまま受けとる限り、ウィトゲンシュタインは、まさに（人間の）「家族」をモデルにして、この類似性を特徴づけていることになる。そしてそれは、ニーチェの思考の形態をモデルにした家族的類似性とも、ニコのように幾何学をモデルにした家族的類似性とも、あるいはショーペンハウアーのように植物の形態をモデルにした家族的類似性とも異なった、ウィトゲンシュタインの家族的類似性の独自性を示している。

このことはまた、「家族的類似性」という概念それ自体がまた家族的類似の性格をもっている、ということを示している。すなわち、ウィトゲンシュタイ

ンの提示する家族的類似性、ニーチェのそれ、ニコのそれ、そしてショーペンハウアーのそれ、それらは共通の本質をもっているのではなく、互いに家族的に類似している。これはさらに拡大して次のようにも言えよう。ウィトゲンシュタインが挙げている「ゲーム」に関して成立している家族的類似性、「数」に関して成立しているそれ、「読む」に関して成立しているそれ等々は、共通の本質をもっているがゆえに「家族的類似性」と呼ばれているのではなく、それらの類似性が互いに類似しているがゆえに「家族的類似性」という同じ一つの名称で呼ばれている、と。

2. 初出

Glock [1996: 120] は、ウィトゲンシュタイン自身が「家族的類似性」という言葉をはじめて用いたのは、'Big Typescript'（と通常呼ばれているタイプ原稿、以下 BT と略記）の第五十八節においてであると書き記している。しかし、この情報は訂正を必要とする。というのは、その BT にあるのとはほぼ同じ文章が、それ以前に書かれた手稿のなかに見出され、そこにすでに「家族的類似性」という言葉が登場しているからである。

この BT は、ウィトゲンシュタインの著作目録として研究者たちに広く受け入れられている von Wright の目録（von Wright [1993]）においては、TS213 という番号が付けられたタイプ原稿である（'TS' は typescript を表す）。ところで、ウィトゲンシュタインの著述は通常、まず手書きの草稿を作成し、次にそれらのいくつかを口述して、タイプ原稿を作成させるという過程を経て行なわれていた。つまり、多くの場合、タイプ原稿にはそれに先立つ手書きの原稿（手稿）が存在しているのである。von Wright の目録では、その手稿群に 'MS' という名前がつけられ分類されている（'MS' は manuscript を表す）。

さて、BT は文字通りタイプ原稿であり、von Wright [1993] によれば一九三三年に完成している。そして、最初に述べたように Glock は、「家族的類

似性」という用語の初出をここに求めているのだが、実際にはこのBTの元となった手稿のなかにすでにこの用語は登場している。その手稿は von Wright の目録では「MS111」という番号が付けられた手稿であり、「家族的類似性」という用語の初出となる箇所にはウィットゲンシュタインが書き込んだ日付から、この言葉がはじめて用いられたのが一九三一年八月十九日であったことがわかる。

MS111 に「家族的類似性」という言葉が登場する前後の文章は、多少の異同はあるものの⁵、BT に収録されている文章と基本的に同じ文章である。つまり MS111 が BT の文章のオリジナルなのであり、したがって「家族的類似性」という用語の初出も BT ではなく、MS111 であるということになる。

さて、初出箇所であるその MS111 では次のように述べられている。長くなるが以下に引用してみる。（現在、この MS111 の当該箇所は Wittgenstein [1998: 21f.] に収録されており、以下の引用はその邦訳であるウィットゲンシュタイン [1999: 63f.] に主としてもとづく。）

次のようにシュペングラーが言っていたなら、彼はもっとよく理解されるのではないだろうか。「私は、さまざまな文化期を、家族の生活になぞらえているのである。一家族のなかには、家族的類似性というものがある。他方、さまざまな家族のメンバーの間にも、ある類似が見られる。家族的類似性は、これこれの点などで、他の類似性とはちがっている」と。つまり私が言いたいのは、こういうことだ。比較の対象、つまり、この観察方法をひきださせた対象が、提示される必要がある。でないと、議論がどんどんゆがんでしまうからだ。なにしろ、観察の原型に当てはまるのがすべて、私たちの観察の対象にも、いやおうなしに当てはまるのである、と主張されることになり、そうなると、「いつも…にちがいない」と主張されてしまうからである。

さて、なぜそうなるのかといえば、観察するとき、原型の特徴にこだわろ

うとするからだ。しかもそのときには原型と対象を混同し、原型だけの性格であるはずのものを、対象に独断的にくっつけてしまうことになる。他方、観察が、たった一例だけにしか当てはまらない場合、観察には、私たちのほしがっている一般性が欠けていると思われる。だが原型は、まさに原型としてすえるべきである。つまり、観察全体の性格であり、観察のかたちを決めるものとして。したがって原型は支配者なのである。そして原型が一般に妥当するのは、原型が観察のかたちを決めるからであって、原型にしか当てはまらないものが、すべての観察対象について述べられるからではない。

というわけで、誇張と独断にあふれた意見にたいしては、いつもかならず、こう質問してもらいたい。「これにかんして本当に正しいのは、どういうことか」。あるいはまた、「いったいどんな場合に、そうなのか」。

簡単な注釈を加えておけば、冒頭で言及されている「シュベングレー」とは（あらためて言うまでもないかもしれないが）Oswald Spengler (1880-1936) のことであり、ウィトゲンシュタインがここで念頭に置いているのはシュベングレーの有名な『西洋の没落』(*Der Untergang des Abendlandes, Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte*, 1918-22) である⁶。

さて、ウィトゲンシュタインのテキストにおける「家族的類似性」という言葉の初出箇所であるこの文章を読むとき、すぐに気がつくのは「原型 (Urbild)」という言葉が頻出していることである。「家族的類似性」という言葉は、「原型」という言葉が頻出するこの文脈においてはじめてウィトゲンシュタインによって書きつけられたのであった。このことが示唆しているのは、「家族的類似性」という概念がすぐれて方法的な概念であるということである。以下、そのことも含めてこの初出箇所に関して若干のコメントを書いておく。

(i) この初出箇所においてウィトゲンシュタインは、まさに（人間の）「家族」をモデルにして家族的類似性という言葉を用いている。一九三一年に書か

れたこの段階において、ウィトゲンシュタインはすでに「家族」をモデルに家族的類似性という概念を用い、さらにそれが「文化期」にも適用可能な概念であると考えていたことをこの初出箇所は示している。

(ii) Wittgenstein [1998: 21f.] 及びウィトゲンシュタイン[1999: 63f.] では、上に引用した文章だけが単独で MS111 から採られて収録されているため、この文章が登場する文脈がわからなくなってしまっている。しかし、MS111 及び BT においては、この文章は括弧で括られている⁷。すなわち、このシュペングラーをめぐる文章は、その直前の文章の注釈ないし補足として書かれているのである。（上の引用文は、原文では 'So könnte Spengler besser verstanden werden...' と始まっているのだが、Wittgenstein [1998: 21] 及びウィトゲンシュタイン[1999: 63]では冒頭の'So'（「それゆえ」「したがって」）が訳出されていない。この 'So' は、直前の文章を受けるかたちで用いられている。）そして、その直前の文章においても「原型」という言葉が登場しているのである。いまその部分を Wittgenstein [2005: 203] に従って訳出してみよう。

次のことは最高度の重要性をもっている。すなわち、ある論理計算に対して、われわれがいつもその論理計算が実際に適用される事例のことを考え[るべきであって]、「これらの事例は本当は理想的なものではないのだが、しかしわれわれはその理想的な事例をまだ持つに至っていない」と述べるような事例のことを考え[てはなら]ない、ということである。後者の考え方は、完全に誤った見解の兆候である。私がそもそもその論理計算を使うことができるのであれば、それはまた理想的な使用なのであり、かつ話題となる唯一の使用なのである。

というのも、一方でひとはその事例を本当の事例であると認めることをためらう。なぜなら、それでもなおひとはその事例のうちに、その論理計算を

当てはめることができない複雑な要素を認めるからである。しかし、その事例は論理計算の原型なのである。そして論理計算はその原型から派生して行く。これは何ら誤謬ではなく、また論理計算の不完全さでもまったくない。誤謬は、ぼんやりとした「見通すことのできない」将来における論理計算の適用を「あらかじめ」約束することのうちにある。

BT ではこの文章の直後に括弧に入れられて、先に引用したシュペングラーに関する文章が登場している (MS111 も同様である)。すなわち、ウィトゲンシュタインは論理計算の「原型」について語ったのちに、シュペングラーに言及し、そこでふたたび原型について語っていたのである。そして、いま引用した文章の少し前の箇所でもウィトゲンシュタインは「私は、言語と文法とを計算と見なす」と述べていることから、ここで言われている論理計算の原型とは「言語の原型」のことも含意していると考えられる (次の (iii) で引用する『哲学探究』第一三〇節も参照)。この原型という概念はゲーテの形態学由来している。ゲーテに関しては後で触れるが、シュペングラーの『西洋の没落』の副題に「形態学 (Morphologie)」というゲーテの用語が掲げられていることに注意したい。

(iii) 9 頁で引用した文章において、ウィトゲンシュタインは「私は、さまざまな文化期を、家族の生活になぞらえているのである。一家族のなかには、家族的類似というものがある。他方、さまざまな家族のメンバーの間にも、ある類似が見られる。家族的類似性は、これこれの点などで、他の類似性とはちがっている」と述べていた。ここでウィトゲンシュタインは「一家族のなかには、家族的類似というものがある」という事態と、「[異なった]さまざまな家族のメンバーの間にも、ある類似が見られる」という事態とを、「他方」という言葉を用いて対比している。つまり、ウィトゲンシュタインはここで二つの種類の類似性を対比しているのである。シュペングラーに対するウィトゲンシュタ

インの不満はシュペングラーがこの二つの類似性を明確に分けなかった点にあり、その結果として彼の見るところでは、シュペングラーの「議論はどんどんゆがんで」しまったのである。すなわち、ある文化期内部に見られる諸要素の間にある家族的類似性と、諸文化期の諸要素の間に成立している類似性とを峻別する必要があったとウィトゲンシュタインはここで述べているのである⁸。

(iv) しかしながら、では、「家族的類似性」と「他の類似性」とは具体的にどのように異なるのであろうか。それを解く手がかりはやはり「原型」という言葉に求められよう。いささか乱暴に言ってしまうえば、「原型」が原型として（すなわち「比較の対象」として）設定されているか否かが、「家族的類似性」と「他の類似性」とを分ける指標として（少なくともこの箇所では）考えられているように思われる。そのことは「つまり私が言いたいのは、こういうことだ」以下の部分が示唆していよう。もちろん上の引用文だけから決定的な結論を引き出すことは危険ではあるが、このことは「家族的類似性」という概念がもつ、すぐれて方法的な特性を示している。というのも、ある原型を「比較の対象」として設定し、その原型を中心に他の諸事例との類似性に注意を払いつつ（すなわち、その原型の特徴を一般化してすべての事例に当てはめようとせず）考察を進めてゆくという、ここに示されている方法は、『哲学探究』においてウィトゲンシュタインが自らの「言語ゲーム」という方法を説明している次の文章のまさに「原型」となっているからである。そして、そこでも「(家族的) 類似性」という言葉が要の一つとして登場している。

われわれの明晰かつ単純な言語ゲームは、将来における言語規則を目的にした予備研究—いわば摩擦や大気の抵抗を計算に入れない最初の近似—なのではない。むしろ、これらの言語ゲームは比較の対象として、すなわち類似性と差異との双方を通じてわれわれの言語の諸状態に光を投げかけるべきものとして設定されているのである。（第一三〇節⁹、下線は関口。以下同様）

われわれが不当な、また空虚な主張に陥らないためには、われわれの範例 (Vorbild) をそのあるがままのものとして、比較の対象として—いわば物指しとして—提示するに留めるべきであり、現実がそれに対応しなければならないような先入見として提示してはならない (哲学をするさいにわれわれがいとたやすく落ちこんでしまう独断論。)(第一三一節¹⁰)

3. 訳語の問題

'Familienähnlichkeit' という言葉については、「家族的類似性」という訳語がすでに定着してしまっており、本稿においてもこの訳語を用いているが、この訳語は誤解を招く可能性があると私自身は考えている。というのも「家族」という日本語は主として「一つ屋根の下に同居する比較的少数の構成員からなる血縁集団」のことを、とりわけ現在においては「夫婦とその未婚の子供からなる」核家族、あるいはせいぜい三世代からなる家族のことを連想させてしまうからである。しかし、ウィトゲンシュタインがたとえば「ゲームは Familie をなしている」と述べるときには、日本語の「家族」が含意する範囲よりももっと広い、遠縁の親族までもを含めた一族のことが意味されている。チェスと将棋とはかなり類似しており、その意味では兄弟とも考えられようが、チェスと野球とはかなり遠縁の親戚ほどに離れている。そのくらい広い範囲までを包含するべく意図されたこの言葉の訳語としては「一族的類似性」や「親族的類似性」の方が明らかに適切であろう。また、ウィトゲンシュタインが人間の Familie の例に言及したさい (『哲学探究』第六十七節)、彼の念頭に置かれていた集団は、「家族」よりも「一族」「親族」という言葉で表現した方が適切であろう。しかしながら、もはや大勢は動かしがたく、衆寡は敵しない。そこで本稿では不本意ながら「家族的類似性」という従来の訳語を用いることにする。

つけ加えて述べておけば、「家族」という訳語が適当であるとは言えない理由がもう一つある。というのは、「家族」という日本語によっては (典型的に

は「核家族」のことを考えた場合には)、ある家族の外延が明確に定まってしまうということである。ところが、ウィトゲンシュタインの「家族的類似性」がもつ一つの重要な帰結は、たとえば「ゲーム」という家族の外延が明確には定まらない、ということであった（同第六十八節、第七十一節）。その点からしても、「家族」という訳語よりも「一族」ないしは「親族」という訳語の方が適切であろう。一般に、どこまでが「一族」であり「親族」なのか、明確な境界線はない。「遠縁の親族」という言い方が、どの範囲までを含むのか、誰も明確なことは言えないであろう。¹¹

4. ゲーテとの関係

ウィトゲンシュタインとゲーテとの関係、つまり、ゲーテがウィトゲンシュタインに与えた影響は深く広範囲に及ぶ¹²。話を拡散させないためには、焦点を家族的類似性に絞らなければならないが、それでもこの主題の性格上ある程度話の拡散は避けがたいことをあらかじめお断りしておく。

さて文字通りの管見の限りでは、ゲーテは「家族的類似性」という言葉を用いていない。しかしながら、ウィトゲンシュタインの「家族的類似性」の概念に、ゲーテが及ぼした影響は大きいとすることができる。その一端は、さきに「初出」の部分で引用した文章において、ウィトゲンシュタインが「原型」という言葉を重視し多用していたこと、ならびに、この原型という概念が、家族的類似性を示唆する文章のなかで登場していることからわかるであろう。ここでの「原型」は、多分にゲーテ的な意味合いで用いられているのである。

ゲーテとウィトゲンシュタインの家族的類似性との間にある関係を推測するための手がかりは、ワイスマンが記録した次のようなウィトゲンシュタインの発言であろう。

われわれがここで行なっていることは、ある意味で、植物のメタモルフォー

ぜについてのゲーテの考え方に似ている。(中略)

ゲーテから「原—植物 (Urpflanze)」という考え方が生れた。(中略)だが、このことによってどのような問題が解決されるのか。展望を与える叙述 (Übersichtliche Darstellung) という問題である。「植物のすべての器官は葉が変容したものだ」というゲーテの命題は、われわれにある図式を与えてくれる。その図式によって、われわれは植物の諸器官を、言わば一つの中心 [=原—植物] を軸にして、それら諸器官の類似性の程度にしたがって分類することになる。[この図式によって] われわれは、葉の形態がどのように変容してゆくか、そのさまを見ることになる。子葉や元となる葉から徐々に発達しながら葉へ変容してゆくさまを、そこから、わずかな推移を経ながら萼へと、そして、なかば葉で、なかば花卉であるような、あるいは、なかば花卉で、なかば雄蕊であるような器官へと変容してゆくさまを見るのである。われわれは、葉を、言わば、さまざまな形態というその自然な状況のうちに見る。(中略) そして、それこそ、われわれが行なっているところのものである。われわれはある言語形態を、それをとりまく状況のなかに並置する。類似し血縁関係にある (ähnlich und verwandt) 諸 [言語] ゲームという背景に照らすことで、われわれの言語の文法を見てとる。そして、そのことによって [哲学的な諸問題が引き起こす] 不安が追い払われるのである。(Wittgenstein & Waismann [2003: 310]、強調は原文)

ここには、「家族的類似性」のみならず、「言語ゲーム」や「展望」といった後期のウィットゲンシュタインの中心的概念について、そしてそれら相互の関係について、いくつもの重要な論点が述べられている。以下、この引用文に関して若干のコメントを述べたい。

(i) 上の引用文における議論のポイントは次のように要約できよう。すなわち「ゲーテの図式に従えば、原—植物 (あるいは原型) を軸に据えることを通

じて、植物の変容のさまを展望することができる。それと同様に、この図式を用いれば、ある言語形態を軸に据えることを通じて、そしてそれと家族的に類似している諸言語ゲームを背景とすることによって、言語の文法を展望することができる。その結果、哲学の問題が解消される」というものであろう。

(ii) ゲーテは「原—植物」という原初的な形態を「一つの中心」として設定した。それと同じように、ウィトゲンシュタインは「原初的言語ゲーム (primitive language-game)」を「一つの中心」、彼の言い方では「比較の対象」として設定している。確認のために、『哲学探究』第一三〇節をもう一度引用しておこう。

われわれの明瞭かつ単純な言語ゲームは（中略）比較の対象として、すなわち類似と相違との双方を通じてわれわれの言語の諸状態に光を当てるべきものとして設定されている。

ここで言われている「明瞭かつ単純な言語ゲーム」とは、典型的には『哲学探究』第二節で導入された次のような「原初的な言語」のことである。

A は石材によって建築を行なう。石材には台石、柱石、石板、梁石がある。B は A が必要とする順序にしたがって、次々に石材を A に渡すことになっている。その目的のために、二人は「台石」「柱石」「石板」「梁石」という語からなる一つの言語を使用する。A がこれらの語を叫ぶ。——B は教えられた通りに石材を持って行く。これを完全な原初的な言語と考えよ。

この「原初的な言語」は、ゲーテの「原—植物」と同じ意味で「原—言語」であり、そこからより複雑な言語形態へと連続的に発展してゆく原型である。ウィトゲンシュタインは次のように述べている。

…[原初的言語ゲームという] 単純な過程のうちに、もっと複雑な言語形態に連続している言語形態が見てとれる。この原初的言語形態に少しずつ新しい形態をつけ加えてゆけば、複雑な形態が作りあげられることがわかる。(Wittgenstein [1958: 17]、ウィトゲンシュタイン [1975: 7])

「単純な過程のうちに」すでに「もっと複雑な言語形態に連続している言語形態が見てとれる」という表現は、「すべての植物の器官は葉が変容したものだ」というゲーテの言葉を強く連想させよう。その意味でウィトゲンシュタインの「原初的言語 (ゲーム)」とは、ゲーテ的な表現で言えば「原—言語」なのである。

(iii) これに関連して指摘しておけば、ウィトゲンシュタインはある遺稿のなかで「言語の起源およびその原初的形態とは反応である」と述べている (Wittgenstein [1993: 394])。ここで言われている「起源」は、進化論的な、時間軸上の起源として捉えるべきではない。ウィトゲンシュタインは、言語の起源についての経験科学的な探究を行なっているわけではないからである。むしろ、彼が語る「言語の起源」とはゲーテの「原—植物」と同じ意味で捉えるべきものであろう。(ちなみに、この発言のあとにウィトゲンシュタインはゲーテの『ファウスト』から「はじめに行為ありき」という言葉を引用している。) ウィトゲンシュタインが引用していた「植物のすべての器官は葉が変容したものだ」というゲーテの命題をもじって言えば、「われわれのすべての言語形態は反応が変容したものだ」という意味における起源が、ウィトゲンシュタインがここで言う言語の起源である。実際、『哲学探究』第二節に描かれていた原初的言語は、「意味」と「思考」とを完全に排除した反応だけからなる言語ゲームとして設定されている。ただし、この言語ゲームの起源=原型は、あくまでも「比較の対象」として設定されており、すべての言語ゲームについて当てはまるべき特徴として想定されているのではないことは、ウィトゲンシュタイン

が強調していた通りである。

(iv) 原初的言語ゲームという原型への注目、また子供という原型への注目でもある。そもそも原初的言語ゲームとは、ウィトゲンシュタインによれば「それを通じて子供が母語を習得する」ゲームである（『哲学探究』第七節。Wittgenstein [1958: 17]、ウィトゲンシュタイン [1975: 7] も参照）。「言語ゲーム」という言葉は『哲学探究』第七節においていくつかの定義が与えられているが、その最初の定義がこの「それを通じて子供が母語を習得する」ゲームというものであり、このなかに「子供」という言葉が出てきていることに注意したい。「原初的言語ゲーム」という原型は、子供と不可分のかたちで提示されているのである。

『哲学探究』において（とりわけ、その冒頭部において）、子供への言及が頻出しているという事実は『哲学探究』の読者であれば誰もが気づくことであろう¹³。この事実は、前期の『論理哲学論考』には子供への言及がないことと対比するとき、一層際立つ。実際、『論理哲学論考』においては子供への言及は文字通りに皆無なのである¹⁴。そして、これは偶然ではないだろう。『論理哲学論考』においては、言語はすでに完成体として、言わば一挙に、アプリアリに与えられていた。したがって、そこには言語の習得（そして訓練）という観点は存在しないし、子供の登場する余地もまったく存在しない。それに対して、『哲学探究』においては「子供」（そして「生徒」）が登場し重要な役割を果たしている。そのとき、子供はゲータ的な意味合いで「原—大人」として設定されているのである。子供が進化した形態が大人であるのではない以上、子供と大人との関係は「進化」という時間軸では捉えられない。両者をつなぐ関係は「進化」ではなく、「成長」もしくは「発展」であろう。そして、その意味で両者は連続し類似している。子供（の原初的言語ゲーム）は、それが「比較の対象」とされることを通じて、大人（の言語ゲーム）に対して光を投げかける存在として『哲学探究』に登場してきているのである。そして、その背後にゲー

テの形態論的発想の影響を見てとることができよう。

(v) 長くなりすぎるために 15-16 頁の引用では省略してしまった部分で、ウィトゲンシュタインはこのようなゲーテの発想を、ダーウィンの進化論的発想と対比したうえで、ゲーテの発想に自分の方法との親近性を見ている。ウィトゲンシュタインによれば、ダーウィンの発想は因果的な「時間の図式」だけに従うものであり、「異なった種が共通の祖先から発達した」という「仮説」に基づくものである。しかし、こう述べただけではゲーテとダーウィンの発想の違いはわかりにくいかもしれない。実は、ゲーテとダーウィンを対比し、どちらを選択するか、あるいは両者をどのように調停するかという問題は、十九世紀から二十世紀にかけてヨーロッパの知識人たちを巻き込んだ論争のテーマであった。ウィトゲンシュタインの先の文章は、彼もまたこのテーマに強い関心を抱いていたことを示している。ウィトゲンシュタインには触れられてはいないものの、この論争に関しては上山安敏氏が上山 [1989] で詳しくとりあげているので、そこでの上山氏の記述 (上山 [1989: 301-303]) に依拠しながら、ウィトゲンシュタインの文章を補ってみよう。

上山氏によれば、ルドルフ・オットー (Rudolf Otto, 1869-1937) は「ゲーテとダーウィンの決定的な違いは、ゲーテの言う形ゲシュタルト態とか変ウムゲシュタルト形は類型概念¹⁵の下に捉えられており、動物の低い種から高い種への変ウムヴァントルグ容が考えられていない点にある」と見ている。ダーウィンが「時間軸」(ウィトゲンシュタインの言葉で言えば「時間の図式」)に従って動物の進化を捉えるのに対し、ゲーテは「時間軸を入れた変ウムヴァントルグ容でなく、無時間性の類タイプ型」を認めるのである。さらにオットーは「ダーウィン説は「発展」ではなく、たんなる生物変移説トランスフォルミスムスに過ぎない」のに対して、ゲーテの言う「発展とは高いものが低いものの中に賦与されていることで、花が蕾の中に賦与され、樹は芽の中に賦与されている」ことであると述べている (引用文中におけるルビはすべて上山氏)。

同じく上山氏によれば、ニーチェもまた「反ダーウィン」の立場からこの

「ゲーテ対ダーウィン」の対立に言及している。「類型の最も美しい表現」という賛辞をゲーテに捧げるニーチェは、「類として人間はいずれか他の動物と比較していかなる進歩をも示していない。全動植物界が低級なものから高級なものへと発達しているのではない」とダーウィン批判を展開したうえで、「そうではなく、すべてが同時である、たがいに重なりあい、入れこみあい、対立しあっている」と述べている。この最後の表現がウィトゲンシュタインの家族的類似性を連想させることも興味深いが、ここでのポイントは「すべてが同時である」ということである。

オッターもニーチェも、ゲーテの類型という考え方の特徴を「無時間性」に見ている。そして、ウィトゲンシュタインもまた、「時間の図式」だけに従うダーウィンの進化論と対比するかたちで、ゲーテの「原—植物」という「類型」を捉えていた。時間の図式はまた、因果の図式でもある。ある原因にもとづいてある結果が生じ、そしてその結果が原因となって次の結果を生じる、という因果連鎖は時間の図式を前提にしている、あるいは少なくともそれと不可分である。ウィトゲンシュタインが、因果的な図式に基づく思考法に対して批判的であったことについては、たとえば Wittgenstein [1993: 374] を参照していただきたい¹⁶。いずれにせよ、ウィトゲンシュタインの独創は、このゲーテの発想を言語形態の発展に当てはめた点にある。そして、さらにそれを哲学的な諸問題を破壊し解消するための方法として応用した点にある。

II 家族的類似性をめぐる予備的考察

以下、紙幅の都合もあるため、ごく簡単に家族的類似性という概念を検討するための予備的なコメントを書き記しておきたい。

(i) 家族的類似性という概念を導入するにあたってウィトゲンシュタインは、その正当性を示すための論証をまったく与えていない。彼はただ「考えるな、見よ」と言うだけである（『哲学探究』第六十六節）。これは命令ではあっても、

論証ではあるまい。ウィトゲンシュタインにとって、家族的類似性という見方の正しさを示すための論証は不必要なのである。ここで「すべてのことが公然とそこにあるから、説明すべきことなど何もないのである」（同第一二六節）というウィトゲンシュタインの言葉を思い起こすべきであろう。家族的類似性は言語の使用の背後に隠れているのではなく、そこにすでに公然とあらわになっている。したがって、「見ればわかる」のである。ところが、「考える」哲学者たちにはそれが見えていない。その意味で、家族的類似性とは「およそのごとの、われわれにとって最も重要な諸側面は、その単純さと平凡さによって隠されている（ひとはそれに気づかない—それがいつも眼前にあるから）」（同第一二九節）とウィトゲンシュタインが指摘する事態が当てはまる典型的かつ最も重要な事例の一つである。公然とあらわになっている家族的類似という「いつも眼前にある、最も重要な側面」に気づかせるために、ウィトゲンシュタインは哲学者たちに「考える」という態度から「見る」という態度への態度変更を求めた。それがかの命令というかたちで表現されているのである（そして、前期のウィトゲンシュタイン自身が「眼前に」つねにあった家族的類似性に気づいていなかった）。必要なのは論証ではなく、態度の変更なのである。

（ii）家族的類似性という見方は、しばしば本質主義批判、ないしは反本質主義的なテーゼとして解釈されるが、そしてそれは全面的に間違っているわけではないが、そのような解釈には注意が必要である。というのも、ウィトゲンシュタインは哲学者たちが想定してきた「本質」という概念にとって代る、より良い哲学的理論を構築するためにこの家族的類似性という考え方を提示したわけではないからである。ウィトゲンシュタインはたんに別の見方、別の態度の可能性を提示しているだけである（その意味で、それは本質主義に対するアンチテーゼですらない）。「われわれは言語の使用に関する自分たちの知識に一つの秩序をもたらしたいと思う。ただし、それは一定の目的のための秩序、多くの可能な秩序のうちの一つの秩序なのであって、唯一絶対の秩序（die

Ordnung) なのではない」(『哲学探究』第一三二節、強調は原文)と彼は述べている。自らのもたらす秩序をどこまでも「多くの可能な秩序のうちの一つ」として提示しようとするウィトゲンシュタインの姿勢に鑑みれば、家族的類似性という見方を、本質にとって代る新たな唯一絶対の観点にまで祭り上げることは、彼の意図に反していると言えよう。ウィトゲンシュタインの意図は、「本質があるのでなければならぬ」というアプリアリな想定がもつ必然性に、家族的類似性という「別の可能性」を対置することを通じて、揺さぶりをかけることにある。自らが提示する「秩序」を、「多くの可能な秩序のうちの一つ」として提示するという後期のウィトゲンシュタインの姿勢は、命題の一般形式という本質を「唯一絶対の秩序」として提示した前期の姿勢と対比されるべきものである。さらに言えば、この姿勢は彼が他の観点を提示する際にも貫かれていると見るべきであろう。たとえば、言語を総じてゲームとして見るという彼の後期の観点は、言語(命題)を総じて現実の像と見る前期の見方がもつ必然性を揺るがすためのものであり、新たな代替理論として提示されているわけではない。ということは、本質という観点は、一つの可能性としてなお存立する余地があるということである¹⁷。このような「必然性を一つの可能性への転化する」こと、及び「別の可能性を提示する」という態度は、後期のウィトゲンシュタインの哲学的活動を理解するうえで重大な意義をもつと私は考えている¹⁸。

(iii) ウィトゲンシュタインが家族的類似性という観点を説明するに当たって、対象の「性質(Eigenschaft)」という表現を用いずに、「特徴(Zug)」という表現を用いていることには注意をしておく必要があると思われる¹⁹。たとえば彼は「盤ゲームを見よ…。ついでカードゲームに移れ。そこで最初の一群 [= 盤ゲーム] との対応を数々見出すであろうが、共通の特徴(Züge)がいくつも姿を消して、別の共通の特徴が現われる」と述べている(『哲学探究』第十六節)。家族的類似性にとって問題となるのは、さまざまなゲームがもつ性

質ではなく、特徴なのである。このようにウィトゲンシュタインが「性質」あるいは「属性」という言葉ではなく、「特徴」という言葉を用いたことには理由があると思われる。

類似の中心点（そこを中心として、他の同族の諸事例との類似性の度合いを測る起点、すなわち原型）は、論理的にはどこでもとれるし、類似している点として何を選ぶかも論理的には任意である。しかし、それはわれわれの対象への接し方ではない。鳥を例にとれば、類似性の中心点に来るのは、（少なくとも日本においては）雀、ツバメ、鳩、カラスなどであって、コンドルやペンギンは類似性のネットワークの中心には置かれまいであろう。また、類似している点（特徴）として選ばれるのは、「空を飛ぶ」「翼をもつ」「羽毛がある」などであって、「地球上に棲息している」「水分を摂取する」「呼吸をする」「百度以上の温度では生存できない」といった性質は特徴として選ばれないであろう。

このことが示唆しているのは、ウィトゲンシュタインの「特徴」という表現の重要さである。鳥は、一羽の鳥をとりあげても、無数の性質をもっている。しかし、われわれは、それら無数の性質をいわば一視同仁に、あるいは公平無私に認知しているわけではない。われわれには、それらの性質のなかのいくつかは際立って現われてきている。あるいは、それらの性質のなかのいくつかに特に目を留めるのである。そのようなメカニズムがなぜわれわれに備わっているかは、認知科学もしくは進化論のテーマであろう。ともかく、われわれは、無数の性質のなかのいくつかに特に目を留める。それが「特徴」である。

ところで、渡辺慧氏は「二つの物件の区別がつくような、しかし、有限個の述語が与えられたとき、その二つの物件の共有する述語の数は、その二つの物件の選び方によらず一定である」ことを形式的に証明してみせた。具体的に言えば「二羽の白鳥の類似性の度合いと、一羽の白鳥と一羽の家鴨との類似性の度合いとは同じになる」ことが帰結するこの定理を渡辺氏は、「醜い家鴨の仔の定理」と名づけた（渡辺 [1978: 101]）。

この「醜い家鴨の仔の定理」を額面通りに受けとれば、家族的類似性の成立する余地はなくなる。すなわち、あるクラスに属する要素間の類似性はどれをとっても同じ程度であるのみならず、あるクラスと別のクラスとにそれぞれ属する任意の二つの要素をとってみた場合にも、その二つの要素間の類似性の度合いは、他の任意の二つの要素間に成り立つ類似性の度合いとまったく同じであることになる。つまりは、月とスッポンとは、スッポン A がスッポン B に似ているのとまったく同じ程度に、似ているのである。とすれば、そもそもわれわれは類似性を「見る」ことなどできないということになる。まさに渡辺氏自身が言うように、この「定理によれば、類似性などというものはないということになる」であろう。なぜなら「すべてのものが同じ程度に類似しているということは、類似などというもので類を形成することはできないということだから」である（渡辺 [1978: 102]）。とすれば当然、家族的類似性という類似性もまた存在しないことになるだろう。

しかしながら、渡辺氏自身が興味深いかたちで指摘しているように、この定理から「抜け出る」ための方法がある。それは「より重要な述語を共有している」という「重要性」という観点を導入することである。「そういう共通な述語の数なら、二つの物件の対によって違」うということになるので、「類似の度合いを語る」ことができるようになる（渡辺 [1978: 103]）。渡辺氏は、この重要性という概念を「我々の生活に対する有用性」というきわめてプラグマティックな観点から規定することを試みている（渡辺 [1978: 104]）。

この定理は、かえって類似性が成立する条件を明らかにしていると言えよう。形式的には成立するはずのない類似性が成立しているのは、われわれがこの世界における複数の対象（物件）の間に、「より重要である述語（性質）」を認めているがゆえである。「醜い家鴨の仔の定理」が結果的に示しているのは、まさにそのことであろう。そして、ウィトゲンシュタインが「家族的類似性」という類似性を提示するに当たって、「性質」という中立的（抽象的）な表現を

用いずに、「特徴」という言葉を用いたことは、そこから理解することが可能であると思われる。

(iv) ウィトゲンシュタインはゲームという概念が家族的類似の概念であることを示したのちに、ゲームとは輪郭のぼやけた概念であると指摘する(『哲学探究』第七十一節)。彼は「ここまでがゲームで、ここから先はゲームではない、というような境界線を指し示すことが君にできるだろうか」と問い、それに対してきっぱりと否定的な答を与えている(同第六十八節)。ここでウィトゲンシュタインがゲームという概念のあり方を通じて、言語という概念のあり方を指摘していることは明らかである(同第六十五・六十六節)。ということは、言語という概念もまた、輪郭のぼやけた概念、すなわち「ここまでが言語で、ここから先は言語ではない」という境界線を明確に指し示すことができない概念であることになる。たとえば『哲学探究』第十八節でウィトゲンシュタインは「第二節・第八節の言語が命令だけから成り立っていることは気にかけるに及ばない。このことのためにそれらの言語は不完全である、と君が言うのなら、われわれの言語は完全であるかどうか自問してもらいたい。…(どのくらいの家々、どのくらい街々があると、都市は都市として存在し始めるのか)」と述べている。都市の場合と同様に、どれだけの条件(語彙、文法規則、等々)が揃えば言語は言語として存在し始めるのか、そしてどれだけの条件を欠くと言語は言語ではなくなるのか、明確なことは誰にも言えないとウィトゲンシュタインは考えているのである。

言語の境界線がぼやけることは、前期の『論理哲学論考』を支えていた重要な柱である「言語の限界」がぼやけるということである。「ここまでが言語によって語りうる事柄で、ここから先は言語によって語りえない」という重要な境界線がぼやけることになるのである。したがって、「語りえない事柄については沈黙するほかはない」という『論理哲学論考』の末尾の言葉も、それが明確な「言語の限界」の存在を前提にして書きつけられた言葉である以上、家族

的類似性という観点によって決定的な変容を蒙ることになる。この帰趨を正確に測定し見届けることは別の機会に譲らざるをえないが、もう一つ、言語の限界がぼやけることに連動して、世界の限界もぼやける可能性があることを指摘しておきたい。というのも、『論理哲学論考』において「(私の) 言語の限界」と「(私の) 世界の限界」とは一致していたからである（『論理哲学論考』五・六）。

ただし、『哲学探究』には「世界」という言葉がほとんど出てこないという事実もあわせて指摘しておかねばならない。この事実は、『論理哲学論考』における「世界」という言葉の頻出ぶりと対比するとき、一層異様な印象を与える。実際、『論理哲学論考』的な観点からすれば「世界」という言葉が出てきてしかるべき場面でも、「世界」という言葉は『哲学探究』では出てこない。たとえば、『論理哲学論考』において言語（命題）は世界（現実）の像である以上、ある言語を想像することはある世界を想像することに他ならない。ところが、『哲学探究』においては「一つの言語を想像することは、一つの生活形式を想像することである」と述べられている（第十九節）。この一節は、後期において言語（ゲーム）が世界のあり方から解放され、それに代わって、行為（生活）の形式に強く結びつけられたことを明確に示す重要な文章であると私は考えるが、家族的類似性の問題から離れてしまうので、今回はこれ以上立ち入らない。ただ、最晩年の『確実性の問題』（*Über Gewissheit*）において、「世界」が「世界の像（Weltbild）」という表現で再登場することだけを指摘しておく。

結びにかえて

冒頭にも述べたように、以上はウィトゲンシュタインの家族的類似性という概念を考えるに当たっての基礎的なデータと基本的な問題とを瞥見したものに過ぎない。これらを踏まえてこの概念の中身を『哲学探究』その他のテキスト

に即しながら具体的に検討する作業は、本稿に引き続く論考において行なう予定である。

注

- 1 本稿は当初、関口 [2009] の一部に組み入れるために書き始めたものであった。ところが、いざ書き始めてみると当初の予想より膨大な分量となってしまう、そこにはまったく収めきれなくなってしまった（今回本稿を書いてみて、そもそもそこに収めきれないものがないものであったことに今さらながら気づいた）。そこで今回、関口[2009] のために用意していた原稿に修正と加筆とを施したうえで、ここに独立した論文として発表することにした。
- 2 飯田隆氏はかつて、「後期ウィトゲンシュタイン哲学の一般的イメージを形成している、三つのキーワード」として、「言語ゲーム」「生活形式」「家族的類似」を挙げたうえで「ウィトゲンシュタインの哲学と関連してこうした語が出てくるたびに、私はいくらかうんざりする。こうした語をタイトルの一部とする論文には、最初から眉に唾をつけてかかる、というのが私の習慣である」と書いたことがある（飯田 [1997: 350f.]）。飯田氏は、その後続けて「そうした論文が必ずしもつまらないというわけでは」なく、「いろいろと教えられることが多い」とも書いているが、氏のような世界的レベルの言語哲学の第一人者がこのような発言をしたことが、わが国のウィトゲンシュタイン研究者たちに与えた影響は小さくなかったのではないかと思う。私がここで「家族的類似」という語を「タイトルの一部とする」論文を発表するのは、もちろん飯田氏を「うんざり」させるためではない。後期のウィトゲンシュタインの哲学的活動を理解するのに外せない（と私自身は考える）この概念について、「一般的なイメージ」だけが先行し流布している現状を少しでも改善したいと考えているからである。
- 3 ウィトゲンシュタインとニーチェとの関連についてむしろ注目すべきなのは、ニーチェが本文での引用に続けて次のように述べていることであろう。

されば、文法の共通の哲学によって一すなわち同じ文法的機能による無意識の支配と指導によって一はじめから哲学体系が同質の展開と順列をなすべき定めをもつ

ていることは、避けがたいことである。同時に、世界解釈の他の可能性への道が閉ざされてあることも、避けがたいことである。ウルル＝アルタイ語においては主語の概念がはなはだしく発達していないが、この語圏内の哲学者たちが、インド＝ゲルマン族や回教徒とは異なった目で「世界を眺め」、異なった道を歩きつつあることは、非常にありうべきことである。ある文法的機能の呪縛は、窮極において、生理的価値判断と人種条件の呪縛でもある。(Nietzsche [1984: 30]、ニーチェ [1954: 37])

ウィトゲンシュタインの哲学の方法を多少なりとも知っている人間にとっては、ニーチェがここで用いている「ある文法的機能の呪縛」という表現は目を留めざるをえないものであるだろう。とりわけ、「主語の概念」が発達しているインド＝ゲルマン語族の哲学者たちが、「世界解釈の他の可能性」を、すなわち「異なった目で世界を眺め」る可能性を閉ざされた状態にあるというニーチェの指摘は、(本論で後述するように)「別の可能性」を追求した後期のウィトゲンシュタインの態度と親和性をもっているように思える。

- 4 ショーペンハウアーは、形態学を「自然誌 (Naturgeschichte)」とも言い換えているが (Schopenhauer [1995: 153]、ショーペンハウアー [1980: 242]。ただし後者では「博物学」と訳されている)、この「自然誌」という言葉も後期のウィトゲンシュタインを読み解くためのキーワードの一つである (『哲学探究』第二十五節)。ウィトゲンシュタインの「自然誌」という言葉を、「形態学」に置き換えて解釈する試みも可能かもしれない。
- 5 たとえば BT の該当箇所には、タイピストのタイプミスが含まれており、欄外にウィトゲンシュタインが手書きでその旨注記している。また、引用文の第二段落は BT にはない。
- 6 ただし、私は未読。
- 7 MS111 の当該箇所を Wittgenstein [1998-1999] に収録されている写真に当たって確認したところ、書きつけられたノートの紙質とインクの文字とが経年劣化しているためにはっきりとは確認できないものの、括弧に括られているように見える。
- 8 これとは別の解釈も可能かもしれない。すなわち、ウィトゲンシュタインは「一家

族のなかには、家族的類似というものがある」という事態と、「[異なった]さまざまな家族のメンバーの間にも、ある類似が見られる」という事態との双方を「家族的類似性」と呼び、それ以外の類似性のことを「他の類似性」と呼んでいる、という可能性である。

- 9 この箇所も含めて『哲学探究』からの引用文は、基本的にウィトゲンシュタイン [2000] に依拠している。ただし、この第一三〇節の訳文については、そこに明白な誤訳があったため修正したうえで引用している。ちなみにその誤訳は『ウィトゲンシュタイン全集 8』（藤本隆志訳、大修館、1976年）から引き継がれたものと推測される。
- 10 飯田隆氏は、この第一三一節に現われる「独断論」とはシュペングラーのことを念頭に置いて書かれていると指摘している（飯田 [2001: 9]）。この飯田氏の指摘は、ウィトゲンシュタインがこの第一三一節の初期のバージョンである MS220 の該当箇所において、ウィトゲンシュタインが「私はシュペングラーのことを考えている」とつけ加えているという事実からも裏づけられる。Cf. Baker & Hacker [2005b: 280], Hallett [1977: 228].
- 11 「家族的類似性」という訳語には、実はもう一つ問題点がある。というのも、この「家族的類似性」という日本語が一種の性質を示唆することになり、すると具体的な（あるいは、可算的な）「類似点」という意味合いが薄れてしまうからである。実際、ウィトゲンシュタインは多くの箇所で 'Familienähnlichkeiten'（あるいはたんに 'Ähnlichkeiten'）という複数形を用いており、これを「家族的類似性」という性質を表す（非可算的な含みをもつ）訳語で表現することはいささかなりともミスリーディングであろう。しかし「家族的類似点」という表現はいかにも不格好であるし、かと言って「家族的類似性という性質をもった類似点」と訳すのも何ともまわりくどい。「家族的に類似している点（部分）」くらいが適当なのかもしれない。
- 12 その影響については Rowe [1991]、飯田 [2001]、桑川 [2001]、Breithaupt [2003]、関口 [2009] を参照。
- 13 『哲学探究』における「子供」を、（「外国人」と並んで）言語ゲーム（あるいは共同体）の外部にいる「他者」として捉える解釈が、「教える—学ぶ」の対比軸とともに、柄谷行人氏によってかつて提唱されたことがある（柄谷 [1992]）。この解釈と

視点とは啓発的なものであったし、いまなおそうだと思うが、ウィトゲンシュタイン解釈という観点からすれば、外れていると言わざるをえない（柄谷氏も、それを「ウィトゲンシュタイン解釈」として提示しているわけではないと見るべきだろう。柄谷 [1994: 155] において氏は「私は、べつに…ウィトゲンシュタインは本当はこうなのだ」と主張するつもりはない」と述べている）。本論でも述べたように、ウィトゲンシュタインは子供と大人とを連続して捉えているからである。あるいは、子供は「比較の対象」として、「原—大人」として設定されているからである。ウィトゲンシュタインにとって「すべての大人は、子供が変容したもの」なのである。

- 14 その意味では、『論理哲学論考』の世界は「大人の世界」である。いや、正確に言うべきであろう。『論理哲学論考』においては「子供—大人」の対比軸自体が存在しないのだから、それは「大人の世界」とすらも呼ぶことはできない。
- 15 今後の調査と検討とによっては撤回することになるかもしれないが、私はここで登場する「類型」とは、先に触れた「原型」と同じ概念であると想定している。
- 16 ただし、ウィトゲンシュタインが別の観点からは因果という概念を重視していたことも付け加えておく必要がある。その「別の観点」とはいかなるものであるかということとは「ウィトゲンシュタインと因果」という大きなテーマに関わってきてしまうため、ここではそれについて述べる余裕はない。この問題を考えるための基本文献として黒田 [1992] を挙げておくにとどめる。
- 17 ということはまた、『論理哲学論考』の言語観も、一つの可能性として成立するということである。そして、ウィトゲンシュタインは『哲学探究』においてその可能性を認めていると思われる。『哲学探究』第三節を参照。
- 18 このようなかたちで後期のウィトゲンシュタインの著作を読むことに関しては、Baker [2005] に収録された一連の論考が参考になる。また関口 [1998] も参照。
- 19 『哲学探究』の英訳では一箇所、'property' という単語が第六十七節で登場しているが、同じ箇所のドイツ語の原文にはそれに相当する 'Eigenschaft' という言葉はない。

文献表

Baker [2006]: Gordon Baker, *Wittgenstein's Method, Neglected Aspects*, edited by Katherine Morris, Blackwell Publishing.

- Baker & Hacker [2005a]: Gordon Baker & P. M. S. Hacker, *Wittgenstein: Understanding and Meaning, Volume 1 of An Analytical Commentary on the Philosophical Investigations, Part I: Essays*, Second Edition, extensively revised by P. M. S. Hacker, Blackwell Publishing.
- Baker & Hacker [2005b]: Gordon Baker & P. M. S. Hacker, *Wittgenstein: Understanding and Meaning, Volume 1 of An Analytical Commentary on the Philosophical Investigations, Part II: Exegesis § § 1 – 184*, Second Edition, Extensively Revised by P. M. S. Hacker, Blackwell Publishing.
- Breithaupt [2003]: *Goethe and Wittgenstein*, edited by Fritz Breithaupt et al., Peter Lang.
- Glock [1996]: Hans-Johann Glock, *A Wittgenstein Dictionary*, Blackwell Publishers.
- Hallett [1977]: Garth Hallett, *A Companion to Wittgenstein's "Philosophical Investigations,"* Cornell University Press.
- Nietzsche [1984]: Friedrich Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, Insel Verlag.
- Rowe [1991]: M. W. Rowe, 'Goethe and Wittgenstein', *Philosophy*, 66, pp. 283-303.
- Schopenhauer [1995]: Arthur Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung*, Band I, Surkamp.
- Sluga [2006]: Hans Sluga, 'Family Resemblance,' in *Deepening Our Understanding of Wittgenstein*, edited by Michael Kober, Rodopi.
- von Wright [1993]: G. H. von Wright, 'The Wittgenstein Papers' in Wittgenstein [1993].
- Wittgenstein [1958]: Ludwig Wittgenstein, *Generally Known As Blue and Brown Books, Preliminary Studies for the "Philosophical Investigations,"* Basil Blackwell.
- Wittgenstein [1993]: Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Occasions 1912-1951*, edited by James Klagge and Alfred Nordmann, Hackett Publishing Company.
- Wittgenstein [1998]: Ludwig Wittgenstein, *Culture and Value*, Revised Edition,

edited by G. H. von Wright, revised edition of the text by Alois Pichler, translated by Peter Winch, Basil Blackwell Publishers.

Wittgenstein [1998-1999]: Ludwig Wittgenstein, *Wittgenstein's Nachlass*, Text and Facsimile Version, The Bergen Electronic Edition, CD-ROM, 2vols, Oxford University Press and the Wittgenstein Archives at the University of Bergen.

Wittgenstein [2005]: Ludwig Wittgenstein, *The Big Typescript: TS213*, German-English Scholars' Edition, edited and translated by C. Grant Luckhardt and A. E. Aue Maximilian, Blackwell Publishing.

Wittgenstein & Waismann [2003]: Ludwig Wittgenstein & Friedrich Waismann, *The Voices of Wittgenstein: The Vienna Circle*, edited by Gordon Baker, Routledge.

飯田 [1997]: 飯田隆『ウィットゲンシュタイン』、講談社。

飯田 [2001]: 飯田隆「ウィットゲンシュタインとゲーテの伝統」、『モルフォロギア』第23号、2-15頁、ナカニシヤ出版。

ウィットゲンシュタイン [1999]: 『反哲学的断章』、丘沢静也訳、青土社。

ウィットゲンシュタイン [2000]: 『ウィットゲンシュタイン・セレクション』、黒田巨編、平凡社。

ウィットゲンシュタイン [1975]: 「青色本・茶色本」、大森荘蔵訳、『ウィットゲンシュタイン全集』第6巻所収、大修館。

上山 [1989]: 上山安敏『フロイトとユング』、岩波書店。

ショーペンハウアー [1980]: 『意志と表象としての世界』、西尾幹二訳、中央公論社。

柄谷 [1992]: 柄谷行人『探究 I』、講談社。

柄谷 [1994]: 柄谷行人『探究 II』、講談社。

糸川 [2001]: 糸川麻里生「フェウストとしてのヴィットゲンシュタイン」、『モルフォロギア』第23号、33-46頁、ナカニシヤ出版。

黒田 [1992]: 黒田巨「ヴィットゲンシュタインと因果」、黒田巨『行為と規範』、勁草書房、所収。

関口 [1998]: 関口浩喜「像と「神話」の体系」、『現代思想』、vol. 26-1、334-345頁、

青土社。

関口 [2009]: 関口浩喜「ウィトゲンシュタインの観点から」、『岩波講座哲学 03 言語／思考の哲学』所収、岩波書店。

ニーチェ [1954]: 『善悪の彼岸』、竹山道雄訳、新潮社。

マクギネス [1994]: ブライアン・マクギネス『ウィトゲンシュタイン評伝』、藤本隆志他訳、法政大学出版局。

渡辺 [1978]: 渡辺慧『認識とパタン』、岩波書店。